

青年期における IWM (Internal Working Model) と対人不安

嶋野重行*・鈴木志穂子**・菅原正和**

(2003 年 10 月 31 日受理)

I 問題と目的

I. Bretherton によれば, Internal Working Model (以下, IWM) という用語は, 一般的に考えられている J. Bowlby によって創始されたものではなく, 第二次世界大戦の最中 H. Craik (1943) によって使用され始めた概念であるという (Bretherton, 1990)。Bowlby (1980, 1988) は, 源流が精神分析学にあるアタッチメント理論における表象モデルとして IWM の概念を使用している。IWM とは, 他者と自己の関係についての各個人が持つ認知的スキーマを指している。各個人はこれらのスキーマを現実世界のシュミレーションモデルとして使用することにより, 外界からの情報を処理して生活上の様々な出来事を認知したり, 安全感を得るのに有効な自己の行動のプランを作成すると考えられている (Benoit, D. and Perker, K. C. H., 1994; Ward, M. J. and Carlson, E. A., 1995)。この IWM は, 発達の過程で出会う様々な愛着対象との間でのアタッチメントに関連した出来事を要素として, 個人の内部に体制化されていくと考えるのである。

IWM の形成については, 乳幼児期 (三上, 1998; 尾崎, 2003), 児童期および思春期という発達段階の各時期に徐々に形成されていく。生後 6 ヶ月~5 歳前後が IWM 形成の最も敏感な時期であり, その後もこのような敏感性を次第に減じながら, 少なくとも 15 歳までは可塑性は持続すると考えられている。青年期における愛着要求の存在については, 戸田 (1988, 1989, 1990), 松井 (1990) や清水ら (2002) の報告がある。子どもは乳幼児期に最初の愛着対象である母親に対して愛着を形成し, そこで形づくられた他者に対する安全感をベースに子どもは様々な対象に出会い, それぞれの対象に対してふさわしい様式で愛着を形成していく。また, この時期に形成された IWM は, 一生を通して比較的变化することなく持続する傾向があるとされる。女子中学生から女子大学生, 及び男子大学生を対象とした一連の横断的研究の結果, いずれの年代においても愛着とは自立の反対概念ではなく, また年齢と共に完全に消滅するものではなく, 自我発達の必要時に適切な対象にふさわしい様式で愛着を向けることが自立の発達課題であるとみなされ, 友人関係や夫婦関係にも長いライフスパンにおいて影響がみられるという (Rothbard et al., 1994; Cassidy et al., 1996; Simpson et al., 1996)。

IWM のタイプについて Ainsworth ら (1978, 1991) は, 個人差を実験的に把握する方法として Strange Situation 法を考案し, 乳幼児期の愛着パターンを安定型 (secure), アンビバレント型 (ambivalent), 回避型 (avoidant), の 3 タイプに分類した。この IWM の個人的差異が,

その後の対人関係のスタイルやパーソナリティの形成に発展していくと仮定している。又、HazanとShaver(1987)は、現在の自分にあてはまる愛着の分類と想起した過去の愛着の質とが関わりがあること、そして、それらは現在の対人関係スタイルや社会的適応性と関連性があることを指摘している。

ところで、発達のIWMの違いは対人関係の不安やスタイル、社会的適応性に大きな影響を及ぼしていると思われる。所謂「基底不安」とは異なり、社会的対人不安(social anxiety)の定義は研究者によって多様であり(例えば、「対人場面で個人が体験する不安感の総称」「対人的な状況により不安になりやすい傾向」「他者からの詮索や注目、あるいは単なる他者の存在によって引き起こされる動揺や混乱」「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安傾向」等々)研究者間で必ずしも一致していない。青年期は特に、自己意識が過剰になる発達段階にあり、「対人不安」を自己意識という観点から説明する場合は、自己意識の過剰な状況下において自己の在り方を内省し欠点を強く感じ取り、自己の性格に不安を募らせ劣等感にさいなまれ状態をいう。そこでは、自己の在り方を自ら悩むだけでなく他者に映るであろう自己像を思い描き、それに関して思い悩み対人不安感を高めることになる。

本研究においては、対人場面に実際に遭遇するだけでなく、それを予測することによって不安が生じるという点に注目し、対人不安を「対人場面に遭遇したり、あるいはそれを予測したりすることによって起こる個人の不安反応」と定義する。

対人不安を高める働きをもっていると考えられるパーソナリティ特徴を8項目あげる。

- ① [対人的自己意識の高さ] 対人的自己意識とは自分の容姿、行動、発言などに対する他者からの評価に注意を向け、重視する傾向である。これが強い人は、自分が他者に観察されたり、評価されているということを絶えず意識し過ぎている。
- ② [承認欲求] 他者からの容認、承認、そして愛を得ることを過剰に期待することは、対人不安を経験させ易くするであろう。
- ③ [孤独感] 対人不安と孤独感との関係は相互的なものである。孤独な人は反面他者に好まれたいと強く願っていることがあり、他者からの評価に敏感になってしまう。
- ④ [自尊心] 絶えず自尊心が低いということは、人もまた自己を肯定的に評価していないという確信と関連しているかもしれない。そして、それが対人不安へと結び付いている。
- ⑤ [非合理的認知による社会的困難性] 実際にはそうだと限らないのに、自分は人と上手くやることができず、人間関係に失敗していると一方的に誤解している場合。
- ⑥ [客観的自己認知による社会的困難性] 他人と会話したり、聴衆の前でスピーチを行う場合、他の人ほど訓練さされていないと感じることは、対人不安を高めるだろう。
- ⑦ [肉体的魅力の低さ] 容姿に文化的重要性がおかれている社会においては、自分の容姿が標準以下であると感じることにより対人不安が生じる可能性がある。
- ⑧ [極端に高い自己評価基準] 自己にあまり多くのことを期待することは、自分で考えているほどには他者からよくは見られていないと思うことが多い。その結果として生じる対人不安。

上記のリストにすべてが含まれるわけでは勿論ないが、このように対人不安はその個人が他者にある種の印象を与えたいという目標を持ち、しかもそれに成功できるかどうかの疑問を持っ

たときに生ずるという特徴がある。本研究は、アタッチメント理論から対人不安への介入の視点を得ることを目的とし、IWM に基づく愛着の形成が青年期における対人不安に影響を与えているか否かを分析し考察する。

II 方 法

〈調査対象〉本研究の調査対象は、国立 A 大学 4 学部の学生 244 名である。

〈調査時期〉2002 年 7 月に調査を実施した。

〈材料と手続き〉

- ① 内的作業モデル尺度：戸田ら (1988, 1989, 1990) が開発し、作成したものを使用した。この尺度は、個人が他者と自分との関係をどのようなものとして捉えているかについて、アタッチメント理論の観点から測定する尺度である。安定型 (secure)、アンビバレント型 (ambivalent)、回避型 (avoidant) の 3 つの下位尺度で構成されている。質問項目の形式は、6 件法 (1. 全くあてはまらない, 2. あてはまらない, 3. ややあてはまらない, 4. ややあてはまる, 5. あてはまる, 6. 非常によくあてはまる) を用いて回答を求めた (尺度項目については Appendix 1 の通りである)。
- ② 対人不安意識尺度：小川の対人不安質問紙の簡略改訂版で、林と小川 (1981, 1982) によって開発されたが 20 年以上の歳月が経っており、我々の因子分析をやり直した data 分析結果からは、大幅な改変が必要であると思われた。この尺度は①対人関係で緊張する悩み、②自分や他人が気になる悩み、③集団に溶け込めない悩み、④大勢の人に圧倒される悩み、⑤自分に満足できない悩み、⑥気分が動揺する悩み、⑦くつろいで人と付き合えない悩み、⑧ささいなことに気に病む悩み、⑨生きている充実感がない悩み、⑩気分のすぐれない悩み、⑪目が気になる悩み、⑫変な人に思われる悩みの 12 個の下位尺度から構成されている。質問項目の形式は、7 件法 (1. 全然あてはまらない, 2. あてはまらない, 3. ややあてはまらない, 4. どちらともいえない, 5. ややあてはまる, 6. あてはまる, 7. 非常にあてはまる) で回答を求めた (尺度項目については Appendix 2 の通りである)。

III 分析と結果

本調査の有効回答は 240 名で、有効回答率は 98.0% であった。内的作業モデル尺度については、先行研究において 3 因子構造であることから、先行研究に従い因子数を 3 つに指定して因子分析 (主因子法、バリマックス回転) を実施したところ先行研究と同じ 3 因子 (固有値 1 以上) が抽出された (Table1)。

それぞれの下位項目では、第 1 因子には 6 項目が含まれ ($\alpha=0.905$, 因子寄与率 29.60), 他者は応答的で、自己は援助される価値のある存在という表象をもつ「安定型 (secure)」と考えられた。第 2 因子には 6 項目が含まれ ($\alpha=0.811$, 因子寄与率 15.70), 他者に対しアンビバレントな表象を持ち、自己不全感が強い「アンビバレント型 (ambivalent)」と考えられた。第 3 因子にも 6 項目が含まれ ($\alpha=0.678$, 因子寄与率 2.12), 他者は拒否的で援助を期待できないため、これを補完するために極めて自己充足的な存在という自己に関する表象を持つ、「回避型 (avoidant)」の 3 つのタイプに分類できた。

Table 1 内的作業モデル尺度の因子分析結果

(n=240)

	因子 1	因子 2	因子 3
私はすぐに人と親しくなる方だ。	0.889	-0.056	-0.062
私は知り合いがでやすい方だ。	0.874	0.035	-0.037
私は人に好かれやすい性質だと思う。	0.806	-0.157	-0.035
はじめてあった人とでもうまくやっていける自信がある。	0.794	-0.160	-0.101
たいていの人私のことを好いてくれると思う。	0.756	-0.167	-0.062
気軽に頼ったり頼られたりすることがある。	0.755	-0.070	-0.179
時々友達が、本当は私のことを好いてくれているのではないかと	-0.128	0.789	0.107
か、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある。	-0.154	0.739	0.042
あまり自分に自信が持てない方だ			
人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと	-0.080	0.738	0.242
思うことがある。	-0.124	0.733	-0.018
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。	-0.127	0.620	0.055
自分を信用できないことがよくある。	0.091	0.572	0.083
私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう。			
あまり人と親しくなるのは好きでない。	-0.109	0.195	0.763
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられる	-0.108	0.179	0.715
と嫌になってしまう。	-0.105	-0.012	0.639
人に頼るのは好きでない。	-0.106	-0.224	0.6390
私は人に頼らなくても、自分ひとりで十分にうまくやっていけると思う。	-0.074	-0.219	0.671
あまりにも人に親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなること	-0.218	0.377	0.511
を求められたりすると、イライラしてしまう。			
人は全面的に信用できないと思う。			
固有値	5.32	2.82	2.12
寄与率(%)	29.60	15.70	11.80

因子1:安定型 (secure)

因子2:アンビバレント型 (ambivalent)

因子3:回避型 (avoidant)

対人不安意識尺度も、先行研究に従い、因子数を12個に指定して、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施した。その結果、抽出された12因子(固有値1以上)それぞれの下位項目は、先行研究とは異なる項目で構成されていた。そのため尺度の内部一貫性を検討するために、全12因子に対し、Cronbachの α 係数を求めたところ、第7因子の「くつろいで人と付き合えない悩み」が0.641、第12因子の「変な人に思われる悩み」が0.484と低かったため、本研究では第7因子と第12因子を使用せず、残りの10因子を確定し、因子分析(主因子法、バリマックス回転)をやり直した。その結果、因子数を5つに指定したときに最も明確に分かれたので、因子負荷量.40未満の項目、二重負荷項目を除外し、計39項目において再び因子分析を行った。その結果、同様の5因子が抽出された(Table 2)。

本研究では、5因子(固有値1以上)を確定して使用し、第1因子には13項目が含まれ($\alpha=0.921$, 因子寄与率35.20%), その内容は「集団に溶け込めない悩み」、「大勢の人に圧倒される悩み」、「自分や他人が気になる悩み」等の下位項目で構成されている。そこで、これらの項目

Table 2 対人不安意識尺度の因子分析結果

(n=240)

項 目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5
人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。	0.816	0.019	0.177	0.081	-0.099
大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。	0.781	0.008	0.220	0.109	0.059
大人数の雰囲気、なかなか溶け込めない。	0.751	-0.034	0.139	0.233	0.239
内気である	0.701	0.020	0.184	0.024	0.018
引っ込み思案である。	0.683	0.143	0.291	0.087	0.154
人の前に出るとオドオドしてしまう。	0.673	0.224	0.251	0.077	0.063
人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない。	0.668	-0.013	0.133	0.228	0.281
気が弱い。	0.666	0.233	0.062	0.085	0.099
グループでのつき合いが苦手である。	0.630	-0.146	0.343	0.167	0.217
大勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような気がする。	0.617	-0.038	0.135	0.192	0.245
会議などの発言が困難である。	0.597	0.164	0.214	-0.018	0.017
人前でごちない自分をさらけ出すのがつらい。	0.574	0.174	0.215	0.295	0.057
小心である。	0.487	0.125	-0.054	0.122	0.023
ひとつのことに集中できない。		0.770	0.150	0.019	0.270
何をやるにも集中できない。	0.019	0.769	0.227	0.019	0.288
ものごとに熱中できない。	0.145	0.642	0.223	0.085	-0.024
決断力がない。	0.214	0.620	-0.039	0.044	0.057
意志が弱い	0.352	0.575	-0.017	0.065	0.348
計画をたてても実行が伴わない。	0.174	0.559	-0.085	0.029	0.190
人の目を見るのがとてもつらい。	0.292	0.124	0.776	0.116	0.099
人と目を合わせていられない。	0.344	0.113	0.713	0.071	0.045
人と話をする時、目をどこへもっていいかわからない。	0.366	0.044	0.661	0.085	0.014
むかい合って仕事をしている時、相手に顔を見られるのがつらい。	0.381	0.302	0.628	0.083	0.079
話をしている時に顔がこわばってイヤな表情になる。	0.263	0.120	0.555	0.194	0.217
自分のことが皆に知られているような感じがして、思うようにふるまえない。	0.276	0.148	0.550	0.308	0.046
友達が自分を避けているような気がする。	0.204	0.161	0.503	0.206	0.340
職場、学校のクラス、近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。	0.188	0.270	-0.038	0.740	-0.108
他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。	0.294	0.281	0.198	0.721	0.131
人と会うとき自分の顔つきが気になる。	0.173	0.129	0.362	0.633	0.102
人と会うときに、自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えているのではないかと不安になることがある。	0.189	0.162	0.296	0.623	0.166
自分が人に、どう思われているのかよく考えてしまう。	0.296	0.218	0.107	0.614	0.339
自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。	0.287	0.102	0.275	0.512	0.346
気分が安定していない。	0.164	0.234	0.047	0.128	0.717
気分がすぐに変わる。	0.087	0.165	0.006	0.081	0.675
みじめな思いをすることが多い。	0.366	0.149	0.334	0.266	0.591
いつも疲れているような感じがする。	0.205	0.280	0.094	0.074	0.547
充実して、生きている感じがしない。	0.250	0.384	0.390	-0.004	0.453
気分が沈んでしまって、やりきれなくなるときがある。	0.276	0.301	-0.125	0.336	0.423
生きていることに価値が見いだせない。	0.314	0.340	0.374	0.084	0.418
固有値	13.73	3.15	1.98	1.95	1.46
寄与率(%)	35.2	8.1	5.1	5.0	3.7

因子 1: 集団に圧倒される悩み 因子 2: 自分に満足できない悩み 因子 3: 対人関係・視線に関する悩み
 因子 4: 自分や他人が気になる悩み 因子 5: 気分が不安定な悩み

をまとめて「集団に圧倒される悩み」因子と命名した。第2因子には6項目が含まれ ($\alpha=0.827$, 因子寄与率 8.10%), その内容は「自分に満足できない悩み」といった項目から構成されているためそのまま「自分に満足できない悩み」因子と命名した。第3因子には7項目が含まれており ($\alpha=0.872$, 因子寄与率 1.98%), その内容は「対人関係で緊張する悩み」, 「目が気になる悩み」といった項目から構成されている。よって, 「対人関係・視線に関する悩み」因子と命名した。第4因子には6項目が含まれ ($\alpha=0.857$, 因子寄与率 1.95%), その内容は「自分や他人が気になる悩み」のみで構成されているのでそのまま「自分や他人が気になる悩み」因子と命名した。第5因子には7項目が含まれており ($\alpha=0.818$, 因子寄与率 1.46%), その内容は「気分が動揺する悩み」, 「生きている充実感がない悩み」, 「気分のすぐれない悩み」等の下位項目で構成されている。そこで「気分が不安定」因子と命名した。

IWMについては, 平均値と標準偏差を用い, 「安定」得点と「アンビバレント」得点と「回避」得点のそれぞれにおいて, $1/2$ 標準偏差 ($1/2SD$) で H 群, M 群, L 群に分類し, 対人不安の得点をもとに分散分析を行った。IWM 3 項目と対人不安得点を分散分析した結果, 有意な相関が認められたので, フィッシャー PLSD 法による多重比較を行った (Table 3)。

Table 3 対人不安における IWM3 項目 H 群, M 群, L 群の得点の
平均値と標準偏差および F 値

(n=240)

安定型		対人不安	
H群(n= 60)		130.82	(46.13)
M群(n=113)		139.76	(32.41)
L群(n= 67)		167.87	(39.33)
F値(自由度)		17.22	***
多重比較(5%水準)		L>M>H	
***: p<.001			
アンビバレント型		対人不安	
H群(n= 71)		180.55	(30.68)
M群(n= 97)		145.74	(29.93)
L群(n= 72)		110.54	(31.05)
F値(自由度)		94.25	***
多重比較(5%水準)		H>M>L	
***: p<.001			
回避型		対人不安	
H群(n= 59)		160.19	(42.79)
M群(n=108)		147.84	(38.56)
L群(n= 73)		129.74	(37.03)
F値(自由度)		10.24	***
多重比較(5%水準)		H>M>L	

***: p<.001

その結果、「安定」得点が低い L 群は、M 群や H 群と比較して有意に不安が高く、M 群は L 群と比較して有意に高かった。すなわち、「安定」得点が低い被験者ほど、対人不安が高いということが明らかになった。また、「アンビバレント」得点が高い H 群は、M 群や L 群と比較して有意に高く、M 群は L 群に比べて有意に高かった。すなわち、「アンビバレント」得点が高いものは、「対人不安」得点が高くなる。「回避」得点が高い H 群は、「アンビバレント」得点ほど高くはないが、M 群や L 群より有意に高く、M 群は L 群より有意に高くなっている。すなわち、「回避」得点が高いものは、対人不安が高いということが示された。更に「対人不安」得点を 1/2 標準偏差 (1/2SD) で H 群、M 群、L 群に分類し、IWM 得点の分散分析を行った結果、有意な関係が認められたので、フィッシャー PLSD 法による多重比較を行った (Table 4)。

Table 4 IWM3 項目における対人不安 H 群、M 群、L 群の
得点の平均値と標準偏差および F 値

	安定型	対人不安	回避型
H 群(n=75)	18.93(6.82)	25.60(4.51)	20.81(5.21)
M 群(n=92)	21.76(4.94)	21.00(3.78)	18.10(4.90)
L 群(n=73)	24.89(6.57)	15.14(4.32)	15.92(5.48)
F 値(自由度)	17.63***	116.14***	16.62***
多重比較(5%水準)	L>M>H	H>M>L	H>M>L

***: $p < .001$

その結果、「安定」得点については、「対人不安」得点が高い H 群と M 群は、「対人不安」得点が低い L 群に比べて有意に低く、M 群は L 群に比べて、有意に低かった。すなわち、「対人不安」得点が高いものは、「安定」得点が低いということが示された。「アンビバレント」得点については「対人不安」得点が高い H 群は、M 群や低い L 群と比較して、有意に高く、M 群は L 群に比べて有意に高かった。すなわち、「対人不安」得点が高いものは、「アンビバレント」得点が高いということが示された。「回避」得点については「アンビバレント」得点ほど高くはないが、「対人不安」得点が高い H 群は、M 群や低い L 群に比べて、有意に高く、M 群は L 群に比べて有意に高かった。すなわち、「対人不安」得点が高い被験者は、「回避」得点が高いということが示された。

次に IWM と対人不安へのかかわりを検討するために、「安定」得点、「アンビバレント」得点、「回避」得点を独立変数とし、対人不安を従属変数とした重回帰分析を行った。その結果、「安定」得点は対人不安の有意な負の予測子であり、「アンビバレント」得点は、有意な正の予測子であることが示された。「回避」得点は、「アンビバレント」得点よりは低いものの正の予測子であることが示された (Table 5)。

Table 5 対人不安における IWM 各項目得点の重回帰分析結果

	対人不安得点	
安定得点	-0.14	**
アンビバレント得点	0.66	***
回避得点	0.10	†
重相関係数	0.75	
決定係数	0.56	

***: $p < .001$ **: $p < .01$ †: $p < 1.0$

これらの結果から、「安定」得点の高いタイプのIWMを持つものは、対人不安が低いことが示唆された。また、「アンビバレント」得点の高いタイプのIWMを持つものは、対人不安が高く、「回避」得点の高いタイプのIWMをしめすものも「アンビバレント」得点の高い人ほどではないが、「対人不安」得点が高いことを示している。

最後に粕谷・菅原(2001)の方法により、「安定型」「アンビバレント型」「回避型」の各得点の平均値を中央値で2群(H群, L群)に分け、さらにその組み合わせによって、以下の8タイプに分類した。そして、それぞれのIWMのタイプ別に、対人不安の平均値と標準偏差を算出し、8つの各タイプ間の分散分析を行った(Table 6)。

HHHタイプ:「安定」得点,「アンビバレント」得点,「回避」得点が平均値より高いタイプ

HHLタイプ:「安定」得点,「アンビバレント」得点が平均値より高く,「回避」得点が平均値より低いタイプ

HLHタイプ:「安定」得点が平均値より高く,「アンビバレント」得点が平均値より低く,「回避」得点が平均値より高いタイプ

HLLタイプ:「安定」得点が平均値より高く,「アンビバレント」得点,「回避」得点が平均値より低いタイプ

LHHタイプ:「安定」得点が平均値より低く,「アンビバレント」得点,「回避」得点が平均値より高いタイプ

LHLタイプ:「安定」得点が平均値より低く,「アンビバレント」得点が平均値より高く,「回避」得点が平均値より低いタイプ

LLHタイプ:「安定」得点,「アンビバレント」得点が平均値より低く,「回避」得点が平均値より高いタイプ

LLLタイプ:「安定」得点,「アンビバレント」得点,「回避」得点が平均値より低いタイプ

Table 6 IWM タイプ別の対人不安得点の平均値と標準偏差および分散分析の結果

	安定型	対人不安得点	多重比較(5%水準)
A	LHH(n=42)	181.24(31.79)	A, B, C, D > E, F, G, H
B	HHH(n=30)	170.60(33.59)	
C	LHL(n=29)	166.69(28.31)	
D	HHL(n=25)	151.76(28.55)	
E	LLH(n=20)	134.10(30.87)	
F	LLL(n=24)	113.21(29.14)	
G	HLL(n=47)	130.82(30.62)	
H	HLH(n=23)	112.78(27.80)	
F 値		26.50***	

***: $p < .001$

その結果、対人不安得点は、有意($F=26.50$, $p<.001$)な群間差が認められた。さらに、多重比較を行った結果、LHHタイプ、HHHタイプ、LHLタイプ、HHLタイプの平均値は、LLHタイプ、LLLタイプ、HLLタイプ、HLHタイプの平均値よりも有意に高いことが確認された。この結果から、「アンビバレント」得点が高いものが対人不安の高さに影響していることが明らかになった。「安定」得点が低く、「アンビバレント」得点が高く、「回避」得点が高いタイプのIWMを持つ場合は、対人不安得点が最も高い傾向があり、「アンビバレント」得点と「回避」

得点が高いタイプほど対人不安が高いということが判明した。しかし、「回避」得点が高い場合でも「安定」得点が高く「アンビバレント」得点が低くなる被験者の存在は興味深い。

IV 考 察

本研究では、大学生の IWM と対人不安との関連を細かく分析し、個々の生育過程の中で形成された IWM が個人の認知や行動に影響をもち、対人不安に影響している可能性が示唆された。IWM を因子別に見ると、安定型の優勢性は、対人不安の低さと関係していることが明らかであり、このことは安定型の特徴である「他者は応答的で自己は援助される価値のある存在であるという象徴」を有していることが強く影響している結果であろう。逆に、安定型因子の劣勢性は、「他者を非応答的であると予期したり、自己は価値のない存在であるという表象」を有しがちになり、消極的できこない対人関係を形成し易く、生活の中での諸々のできごとを過度にネガティブに認知したりすることにつながるため、対人不安を高めてしまうことが考えられる。

アンビバレント因子が優勢であるということは、対人関係が濃密であることを示す。これはアンビバレントの特徴である「他者や外界に対して、近接と不安、抵抗の両面的な表象」をもつことが不安定で用心深く、過度にネガティブな情動をもったり、他者との関係に埋没することで安全感を得ようとしたりする認知や行動のパターンにつながる。このことが日常の出来事を過度にネガティブに認知したり、対人関係において不安感をもったりする要因となっているかもしれない。回避型因子の優勢性は、アンビバレント型因子に比べ影響力は大きくないが、回避型の特徴である「他者を拒否的で援助を期待できない存在にとらえ、これを補完するために自己充足的な自己に関する表象」をもつことが要因となっていると考えられる。これは他者と距離をおいた対人関係や安全感を脅かすような認知を避けようとするなどの認知や行動のパターンにつながり、自己充足的な行動でマイペースな対人関係に寄与する。このような行動や認知特性が孤立を形成していると思われる。

また、「アンビバレント」得点と「回避」得点が共に高く重なったとき、より対人不安を高めていることが明らかになった。アンビバレント型の特徴である「他者との関係に埋没することで安全感を得ようとする表象」と回避型の特徴である「他者を拒否的だと感じてしまう表象」が重なって、より複雑で不安定な感情をもたらしているかもしれない。しかし一方では「回避」得点の高さが対人不安につながらない場合もあり、「安定」得点が高く、「アンビバレント」得点が低いときがそうである。安定型の特徴である「他者を応答的な存在であるという象徴」と「アンビバレント」得点が低いことで「他者に対して、過度にネガティブな情動は持たないという表象」を持ち合わせているので、「回避」得点が高いことはその人自身の行動や認知の孤立には直接つながらず、よい意味でマイペースな対人関係を築いていることが予想される。このような場合、才能に恵まれると独創的で高次の活動と結びつく可能性がある。このように一個人には「安定型」、「アンビバレント型」、「回避型」の各部分が存在し、社会的出会いの多様な違いと相互のバランスによって対人不安を高めたり軽減したりしている。対人不安を軽減させるためには、行動や認知のパターンに影響を及ぼす認知的な枠組みとしての IWM を修正したりすることが必要あり、特に「アンビバレント」得点を低くすることによって対人不安は軽減される。「アンビバレント」得点が高い場合は自分に自信を持てないために人に頼ってしまい、悪循環

環に陥る傾向がある。かかる悪循環から抜け出すためには、他者や外界に対しての不安を理論的に検証しなおし、自己の価値を見直して自己肯定感を高めることがどうしても必要であり、それが対人不安を軽減する第一歩であると考ええる。

V 要 約

本研究では、IWMのタイプと対人不安との関連が分析され、個々の生育過程の中で形成されたIWMが個人の認知や行動に影響を及ぼし、対人不安に影響していることが見いだされた。また、IWMのタイプ毎に対人不安の程度や質に差がみられ、かかる視点から行動や認知の傾向を考慮に入れた行動変容の可能性と対策を探索する必要がある。

Appendix1 IWM尺度 質問項目

〈安定型〉

- 1) 私は知り合いがしやすい方だ。
- 2) 私はすぐに人と親しくなる方だ。
- 3) 私は人に好かれやすい性質だと思う。
- 4) たいていの人は私のことを好いてくれると思う。
- 5) 気軽に頼ったり頼られたりすることがある。
- 6) はじめてあった人とでもうまくやっていける自信がある。

〈アンビバレント型〉

- 7) 私は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
- 8) 時々友達が、本当は私のことを好いてくれているのではないか、私と一緒にいたくないのではないかと心配になることがある。
- 9) 自分を信用できないことがよくある。
- 10) あまり自分に自信が持てない方だ
- 11) 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう。
- 12) ちょっとしたことでも、すぐに自信をなくしてしまう。

〈回避型〉

- 13) 人に頼るのは好きでない。
- 14) 私は人に頼らなくても、自分ひとりで十分にうまくやっていけると思う。
- 15) あまりにも人に親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。
- 16) あまり人と親しくなるのは好きでない。
- 17) 人は全面的に信用できないと思う。
- 18) どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。

Appendix 2 対人不安意識尺度 質問項目

1. つきあいの長い友人と話をする時も緊張がとれない。
2. 先のことを考えすぎる。
3. 集団の中に溶け込めない。
4. 大勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような気がする。
5. 根気がなく、何事も長続きしない。
6. 感情的すぎる。
7. 人と自然につきあえない。
8. 小心である。
9. 将来に自分には、あまる期待が持てない。
10. いつも頭が重い。
11. 人の目を見るのがとてもつらい。
12. 自分は、まわりから変な人に思われているようだ。
13. 自分のことが皆に知られているような感じがして、思うようにふるまえない。
14. 職場、学校のクラス、近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。
15. グループでのつき合いが苦手である。
16. 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。
17. ものごとに熱中できない。
18. 二人きりでいると、相手を意識してしまって緊張してしまう。
19. 知っている人を見かけても、顔を合わせないように道をさけてしまう。
20. 気が弱い。
21. 生きていることに価値が見いだせない。
22. いつも疲れているような気がする。
23. 顔をジーンと見られるのがつらい。
24. 自分のおかしいことが人に知られて、家の者に迷惑をかけているのではないかと気になる。
25. 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。
26. 人と会うときに、自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えているのではないかと不安になることがある。
27. 人との交際が苦手である。
28. 大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。
29. 計画をたてても実行が伴わない。
30. 気分が落ち着かない。
31. 友達と一緒にいるとき顔がこわばったり、赤くなったり、緊張したりする。
32. 内気である
33. 充実して、生きている感じがしない。
34. 気分が沈んでしまって、やりきれなくなるときがある。
35. 人と目を合わせていられない。

36. 相手にイヤな感じを与えるような気がして、相手の顔をうかがってしまう。
37. 話をしている時に顔がこわばってイヤな表情になる。
38. 人と会うとき自分の顔つきが気になる。
39. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない。
40. 大勢の人の前に行くと、足がふるえ胸がつまる。
41. 意志が弱い
42. 気分がすぐに変わる。
43. 気分が安定していない。
44. 引っ込み思案である。
45. 何をやっても、うまくいかない気がする。
46. みじめな思いをすることが多い。
47. 人と話をする時、目をどこへもっていったいいか、わからない。
48. 知らない人からジロジロ見られていると感じたことがよくある。
49. 友達が自分を避けているような気がする。
50. 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。
51. 対人関係がぎこちない。
52. 会議などの発言が困難である。
53. 決断力がない。
54. すぐに気持ちがくじける。
55. むかい合って仕事をしている時、相手に顔を見られるのがつらい。
56. 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。
57. 大人数の雰囲気になかなか溶け込めない。
58. 人の前に出るとオドオドしてしまう。
59. 何をやるにも集中できない。
60. つまらないことをクヨクヨ考える。
61. 知らない人より知っている人と会うときが緊張する。
62. 自分が人に、どう思われているのかクヨクヨ考えてしまう。
63. 仲間の中に溶け込めない。
64. 人前でぎこちない自分をさらけ出すのがつらい。
65. ひとつのことに集中できない。
66. すぐまごついたりとまどったりする。

References

- 1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., and Wall, S. (1978) Patterns of attachment. A psychological study of strange situation. Erlbaum, Hillsdale, NJ.
- 2) Ainsworth, M. D. S. and Eichberg, C. G. (1991) Effects on infant-mother attachment of mother's unresolved loss of an attachment figure or other traumatic experience. In C. M. Perkes, J. Stevenson-Hinde, and P. Marris (Eds.) Attachment across the life cycle. Pp. 160

- 183, Routledge, New York.
- 3) Benoit, D. and Parker, K. C. H. (1994) Stability and transmission of attachment across three generations. *Child Development*, 65, 1444-1456.
- 4) Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss*, Vol. 1. Attachment. Basic, New York.
- 5) Bowlby, J. (1980) *Attachment and Loss*, Vol. 3. Loss, sadness and depression. Basic, New York.
- 6) Bowlby, J. (1988) A secure base: Parent-child attachment and healthy human development. Basic, New York.
- 7) Bretherton, I. (1990) Communication patterns, internal working models, and the intergenerational transmission of attachment relationships. *Infant Mental Health Journal*, 11, 237-252.
- 8) Bretherton, I. Ridgeway, D., and Cassidy, J. (1990) Assessing internal working models of the attachment relationship. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, and E. M. Comings (Eds.): *Attachment in the preschool years*. pp.273-308, University of Chicago Press, Chicago.
- 9) Cassidy, J., Kirsh, S. J., Scolton, K. L., and Perke, R. D. (1996) Attachment and representations of peer relationships. *Developmental Psychology*, 32, 892-904.
- 10) Craik, K. (1943) *The nature of explanation*. Cambridge University Press, Cambridge.
- 11) 林洋一, 小川捷之 (1981) 対人不安意識尺度構成の試み. 横浜国立大学保健管理センター年報, 1, 29-45.
- 12) 林洋一, 小川捷之 (1982) 対人不安意識尺度構成の試み (その 2). 横浜国立大学保健管理センター年報, 2, 23-37.
- 13) Hazan, C. and Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.
- 14) 粕谷貴志・菅原正和 (2001) 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連. 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 11, 137-145.
- 15) 松井三枝 (1990) 対人不安と対自他認知体系: Self-identity System の検討. *心理学研究*, 61, 94-102.
- 16) 三上謙一 1998 母子相互作用から捉えた内的作業モデル～親一乳幼児心理療法 観点から～ 東京都立大学心理学研究 8, 43-49.
- 17) 尾崎康子 (2003) 愛着と気質が母子分離に及ぼす影響. *教育心理学研究*, 51, 96-104.
- 18) Rothbard, J. C., and Shaver, P. R. (1994) Continuity of attachment across the life span. In M. B. Perling and W. Berman (Eds.) *Attachment in adults*. Guilford, New York, pp. 31-71.
- 19) 清水健司, 海塚俊郎 (2002) 青年期における対人恐怖心症と自己愛傾向の関連. *教育心理学研究*, 50, 53-64.
- 20) Simpson, J. A., Rholes, W. S., and Phillips, D. (1996) Conflict in close relations: An attachment perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 899-914.
- 21) 詫摩武俊, 戸田弘二 (1988) 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. 東京都立大学人文学報, 196, 1-6.
- 22) 戸田弘二 (1988) 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (Working Model) からの検討. 日本心理学会第 52 回大会発表表論文集, 27. 北海道大学.

- 23) 戸田弘二 (1989) 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル (2): 対人認知場面における情報処理の違い. 日本教育心理学会第 31 回大会発表票論文集, 198, 北海道大学.
- 24) 戸田弘二 (1990) 女子青年における親の養育態度の認知と Internal Working Model との関連. 北海道教育大学紀要, 41, 91-100.
- 25) Ward, M. J., and Carlson, E. A. (1995) Associations among adult attachment representations, maternal sensitivity, and infant-mother attachment in a sample of adolescent mothers. *Child Development*, 66, 69-79.